ショッピングセンターを訪れる高齢者の主観的幸福感の検討
－ PGC モラール・スケールを用いて －

An Examination of the Sense of Subjective Well-Being of Elderly Persons Visiting a Shopping Center：Using a PGC Morale Scale

澤田孝子[1)]、伊木康人[1)]、山根千絵[1)]、慎恩貞[1)]、田中マキ子[2)]、横山正博[2)]、長坂祐二[2)]
Sawata Takako, Igi Yasuto, Yamane Chie, Shin Eun Jeong, Tanaka Makiko, Yokoyama Masahiro, Nagasaka Yuji

１）　山口県立大学大学院健康福祉学研究科博士前期課程
２）　山口県立大学大学院健康福祉学研究科教授
１）Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University
２）Graduate School of Health and Welfare, Yamaguchi Prefectural University

要旨

本研究は、ショッピングセンターを訪れる高齢者の主観的幸福感を明らかにすることを目的とする。ショッピングセンターを訪れた高齢者 35 名（平均年齢 74.38 ± 6.66 歳）を対象に、無記名自記式質問紙調査を行なった。分析は有効回答者 32 名を対象とし、主観的幸福感を測定する尺度である PGC モラール・スケール改訂版を用い、その得点と対象者の基本属性とから分析した。

その結果、①男女間において、女性が男性より「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高く５％の有意差が認められた。②経済状況では、経済的に困っていない群が困っている群より「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高く、５％の有意差が認められた。③職業については、職業に就いている群が就いていない群より「老化に伴う態度」が高く、５％の有意差が認められた。④家族構成に関しては、二世帯は、夫婦のみの世帯に比べ、「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高く５％の有意差が認められた。

以上より、ショッピングセンターを訪れる高齢者は、「楽しい」という感情を抱きやすく、特に女性では「主観的幸福感」を高めることがわかった。また、ショッピングセンターを訪れることは、生活を支える機能面以外に、「孤独感･不満足感」に対して肯定的な面が高いことから、人生を豊かにするなど、心理的な潤いをもたらす「場所」とも考えられた。

キーワード：ショッピングセンター、高齢者、主観的幸福感、PGC モラール・スケール

Abstract

The purpose of the study was to clarify the sense of subjective well-being of elderly people visiting a shopping center. An anonymous self-response questionnaire was administered to 35 elderly persons（the average age 74.38 ± 6.66 years）. The questionnaire was a revised version of PGC Morale Scale, which is designed to measure a sense of subjective well-being. There were 32 valid responses and their scores based on the questionnaire were analyzed by associating them to the subjects' basic attributes.

The analysis yielded four major findings: (1) The sense of "subjective well-being " and the sense of "loneliness and dissatisfaction" were both greater for the females than for the males（$p < .05$）; (2) The sense of "subjective well-being " and the sense of "loneliness and dissatisfaction" were both greater for the group which had no financial trouble than for the group with financial trouble（$p < .05$）; (3) The "attitude accompanied by the ageing process" is greater for the group with employment than for the group without it（$p < .05$）; and (4)

山口県立大学大学院健康福祉学研究科

the sense of "subjective well-being " and the sense of "loneliness and dissatisfaction" were both greater for the two-household families than for the households consisting of just husband and wife（$p < .05$）.

Based on the above analysis, it can be said that the elderly who visited the shopping center were more likely to have the feeling of “having fun” and that the females especially were prone to an enhanced sense of “subjective well-being.” Moreover, it was implied that visiting a shopping center, besides its practical functions of providing sustenance for daily life, may serve as offering a “place” for psychological affluence, such as a sense of enriched life, because of its high level of positivity as opposed to the sense of “loneliness and dissatisfaction.”

Key words: shopping center，elderly people，sense of subjective well-being，PGC Morale Scale

研究の背景

近年、日本は超高齢社会へと突入するとともに、日本の社会構造そのものにも大きな変化がみられている。高齢化とともに進展している少子化は、血縁機能を低下させ、また同時に戦後の高度経済成長の波は、市民の生活を個人化させ、地域共同体として人と人とのつながりである地縁機能の低下を引き起こした。こうした、家族・地域社会からの関係性の希薄化は、地域に住む高齢者が孤独に陥りやすい状況であるともいえる。

家族・地域から孤独になりやすい状況は、一見、高齢者の「生きがい」にもネガティブな影響を与えるかのように思える。しかし、太湯は「高齢者の場合、家族との同居者の中に家庭内孤立をしている人がみられ、近隣との人間関係についても希薄である。このような高齢者は高齢になればなるほど、どちらかでいえば社会的にも孤立しながら自らの「生きがい感」を維持しているのが現状のようである」と、高齢者の「生きがい」の現状について報告している[1)]。この先行研究から、高齢者は、孤立化しやすい状況の中でも、「生きがい」を保つために、何らかの活動・趣味を持ちながら日々の生活をおくっている可能性があると考えた。

そこで、高齢化率の高い山口県の高齢者は、どのような方法で社会的孤立に対しているのかを考える中で、ショッピングセンターでみかける高齢者の姿が想起された。ショッピングセンターを利用することが、人生を豊かにする一つの方策であるならば、心身の健康を維持する手段として重要な手掛かりと言える。よって、ショッピングセンターを訪れる高齢者の主観的幸福感にどのような影響があるのか、その実態を明らかにすることは、深刻化する超高齢社会における高齢者の生活のあり方を検討する上でも重要である。

研究目的

本論では、高齢者がショッピングセンターを訪れる理由には、買い物以外の目的があるのではないかと予測しその実態に注目することとした。先行研究において、65 歳以上の高齢者が楽しい場所は「買い物をする場所である」との報告[2)]がある。ショッピングセンターは、生活に必要な食糧や日常生活品などを購入するだけでなく、家族や友人との時間を過ごせる「楽しい感情」を抱く場所でもあることから、ショッピングセンターは、肯定的な感情を抱きやすく幸福感や満足感を得やすい場所であり、人生を豊かにすることにも通じると考えた。そこで、山口市のショッピングセンターを訪れる高齢者の「主観的幸福感」がどの様であるのか、その実態について調査・研究を行うこととした。

倫理的配慮

研究の目的と方法とともに、研究参加の任意性と参加撤回・辞退の自由、個人情報の保護、データの利用範囲と研究成果の公表、研究に参加することで得られる利益と不利益などについて同意説明文書を用いて説明し、同意の得られた高齢者を対象とした。

調査については、山口県立大学倫理委員会の承認（25－28）を得た。

方法

1. 対象地域の特性

現在、日本の高齢者は 2975 万人（高齢化率は 23.3%）、後期高齢者は 1471 万人（11.5%）と言われている[3)]。山口県においては、高齢化率が 41 万 8 千人（29.2％）、後期高齢者人口では 22 万人（後期高齢化率 15.4%）である[4)]。このことから、日本の高齢化は急速に進んでおり、その中でも山口県の高齢化率は高い地域の一つである。

2. 対象

研究対象者は、山口県Ｙ市のショッピングセンターに訪れた高齢者のうち、同意を得られた35名を対象とした。有効回答者数は32名であった。性別の内訳は、男性12名（37％）、女性20名（63％）だった。平均年齢は74.38 ± 6.66歳だった。

3. 方法

調査は平成25年８月４日（日）10時から12時に実施し、調査方法は無記名自記式質問紙調査とした。

調査内容は、基本属性（性別、年齢、職業の有無、家族構成、経済状態）の他、ショッピングセンターに関する項目（目的、頻度、イメージなど）、主観的幸福感測定尺度としてPGCモラール・スケール改訂版を用い、回答を求めた。

PGCモラール・スケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale）は、ロートンによって開発された高齢者を対象としたモラール尺度である。ここでモラール尺度とは、「満足感、楽天的思考、および開かれた生活展望の有無を反映した、生活や生活上の諸問題に対する反応の連続体」とされ、適応と類似した概念である。モラールが高いということは、「自分自身についての基本的な満足感を持っていること」「環境の中に自分の居場所があるという感じをもっていること」「動かしえないような事実については，それを受容できていること」という３つの意味が含まれている[5)]。測定されるモラールは、「心理的動揺」6項目、「老いに対する態度」５項目、「孤独感・不満足感」６項目の計17項目であり、主観的QOLの評価を目的としている。

4. 分析方法

主観的幸福感と基本属性（性別、年齢、職業、経済状態、ショッピングセンターを訪れる頻度）は、ｔ検定を用い検討した。主観的幸福感と家族構成との関係については一元配置分散分析を行った。

表1.基本属性

	人数（％）
性別	
男性	12人（37％）
女性	20人（63％）
年齢	
前期高齢者	14人（44％）
後期高齢者	18人（56％）
家族構成	
ひとり暮らし	8人（25％）
夫婦のみ	9人（28％）
二世帯同居（親と子ども）	13人（41％）
三世代同居	0人（0％）
兄弟姉妹と同居	0人（0％）
その他	2人（6％）
職業の有無	
就いている	5人（16％）
就いていない	27人（84％）

結果

１）基本属性（表１）

性別の内訳は、男性12名（37％）、女性20名（63％）であった。

年齢の内訳は、前期高齢者（65 ～ 74歳）は15名（46.9％）、後期高齢者（75歳以上）は17名（53.1％）であった。

家族構成は、一人暮らしは８名（25％）、夫婦のみ９名（28.1％）、二世帯13名（40.6％）、その他が２名（6.2％）であった。

職業に関しては、職業に就いている者が５名（15.6％）、就いていない者が27名（84.3％）であった。

２）ショッピングセンターに関する項目

ショッピングセンターに１名で来店した者は14名（43.8％）、２名は12名（37.5％）、３名は５名（15.6％）、４名が１名（3.1％）であった。

自宅からショッピングセンターまでの所要時間は10分間13名（40.6％）、5分間と20分間各４名（12.5％）、15分間３名（9.4％）、25分間１名（3.1％）、30分間40分間90分間は各２名（6.2％）、60分間１名であった。

経済状態は、困っていない26名（81.3％）、困っている６名（18.8％）であった。

ショッピングセンターに訪れる頻度は、週３回以上11名（34.8％）、週３回未満21名（65.6％）であった。

ショッピングセンターに訪れる目的（複数回答）は、買い物29名（90.6％）、飲食11名（34.4％）、ゲームセンターの利用４名（12.5％）、寒暖の調整５名（15.6％）、待ち合わせ２名（6.2％）、イベント参加１名（3.1％）、その他２名（6.2％）であった。

表2. 基本属性と主観的幸福感の関係

			主観的幸福感	心理的動揺	老化に伴う態度	孤独感・不満足感
全体		(N=32)	10.72±3.726	3.13±1.409	3.34±1.599	4.25±1.368
性別	男性	(n=12)	9.2±3.571 *	2.75±1.215	2.83±1.528	3.67±1.43 *
	女性	(n=20)	11.6±3.619	3.35±1.496	3.65±1.599	4.6±1.231
年齢	前期高齢者	(n=14)	11±4.297	3.21±1.528	3.57±1.742	4.21±1.528
	後期高齢者	(n=18)	10.5±3.323	3.06±1.349	3.17±1.504	4.28±1.274
経済状況	困っていない	(n=26)	11.27±4.1 *	3.27±1.485	3.54±1.503	4.46±1.20 *
	困っている	(n=6)	8.3±4.71	2.5±0.837	2.5±1.871	3.33±1.751
職業の有無	就いている	(n=5)	11±3.559	3.18±1.416	3.54±1.47 *	4.29±1.383
	就いていない	(n=27)	8.8±4.856	2.75±1.5	2±2	4±1.414
訪れる頻度	多い	(n=10)	10.4±3.098	2.9±1.287	3.2±1.476	4.3±0.827
	少ない	(n=22)	10.87±4.039	3.23±1.478	3.41±1.681	4.23±1.572

(t検定 *:p<0.05)

表3. 家族構成と主観的幸福感の関係

		平均値	標準偏差	F値	P値
主観的幸福感	一人暮らし	11.25	4.862	1.932	0.147
	夫婦のみ	8.44	2.743		
	二世帯同居	12.07	2.871		
	その他	10	5.567		
心理的動揺	一人暮らし	3.25	1.581	0.434	0.731
	夫婦のみ	2.67	1.323		
	二世帯同居	3.31	1.377		
	その他	3.5	2.212		
老化に伴う態度	一人暮らし	3.5	1.927	1.597	0.212
	夫婦のみ	2.56	1.424		
	二世帯同居	3.92	1.32		
	その他	2.5	2.212		
孤独感・不満足感	一人暮らし	4.5	1.69	3.184	0.039
	夫婦のみ	3.22	0.833		*
	二世帯同居	4.85	1.143		
	その他	4	1.414		

(一元配置分散検定 *＜0.05)

ショッピングセンターのイメージ（複数回答）は、楽しい 20 名（62.5％）、活気のある 13 名（40.6％）、充実した 8 名（25％）、陽気な、やる気に満ちた各 4 名（12.5％）、快調な、元気な各 3 名（9.4％）、そわそわした、動揺した、びくびくした各 1 名（3.1％）だった。

３）基本属性と「主観的幸福感」の関係（表 2）

PGC モラール・スケールを構成する 17 項目の合計得点を「主観的幸福感」とし、PGC モラール・スケールを構成する 3 因子の合計得点は、「心理的動揺」、「老いに対する態度」、「孤独感・不満足感」とした。

（１）「主観的幸福感」について

「主観的幸福感」の合計点の平均値と標準偏差は、10.72 ± 3.726 であった。各因子は、「心理的動揺」3.13 ± 1.409、「老いに対する態度」4.25 ± 1.368、「孤独感・不満足感」3.34 ± 1.599 であった。

（２）性別と「主観的幸福感」との関係

性別と「主観的幸福感」の平均値と標準偏差は、男性 9.2 ± 3.57、女性 11.6 ± 3.62 であった。「心理的動揺」は男性 2.75 ± 1.21、女性

3.35 ± 1.50、「老いに対する態度」は男性 2.83 ± 1.52、女性 3.65 ± 1.60、「孤独感・不満足感」は男性 3.67 ± 1.43、女性 4.6 ± 1.23 であった。

男女間によって、「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」に有意差が認められた（P ＜ 0.05）。女性が男性より「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高かった。

（３）年齢と「主観的幸福感」との関係

前期高齢者（65 ～ 74 歳）と後期高齢者（75 歳以上）において、有意差はなかった。

（４）職業と「主観的幸福感」との関係

職業に就いている群と、就いていない群では、「老化に伴う態度」に有意差が認められた（P ＜ 0.05）。職業に就いている群が就いていない群より「老化に伴う態度」が高かった。

（５）経済状況と「主観的幸福感」との関係

経済状況は困っていない群と困っている群において、「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」に有意差が認められた（P ＜ 0.05）。困っていない群が困っている群より「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高かった。

（６）ショッピングセンターを訪れる頻度と「主観的幸福感」との関係

ショッピングセンターを訪れる頻度が多い群と少ない群では、有意差は認められなかった。

（７）家族構成と「主観的幸福感」との関係（表３参照）

家族構成と「主観的幸福感」との関係について、一元配置の分散分析を行った。結果、夫婦のみの世帯において、「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」に有意差が認められた（P ＜ 0.05）。二世帯は、夫婦のみの世帯に比べ、「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高かった。

考察

「主観的幸福感」の合計点について他の研究と比較すると、吉原の研究[6]では 9.3 ± 3.4、また小坂の研究７）では 8.06 ± 3.6 であり、本研究の対象者は 10.72 ± 3.726 と高い結果であった。小坂は「日常的に気楽に行くことができる「買い物」も、高齢者にとっては「非日常的なレジャー」と同様に楽しみを与えてくれる存在であることをあらわしている」。また「高齢になるほど身近な「買い物」の存在は相対的に重要になってくることが示唆される。」[7]と述べており、高齢者にとってショッピングセンターを訪れることは、一種のイベント的要素を持ち、「楽しい」「活気のある」など肯定的なイメージが刺激される場所であると考えられる。本研究の対象者では、主観的幸福感の合計点が高いことから、ショッピングセンターを訪れること自体が「主観的幸福感」に影響を与えていると示唆された。

性別との関係については、山口県の高齢者を対象とした青木の研究において「主観的幸福感」は男性 11.3 ± 4.1 ～ 12.0 ± 3.3、女性 10.9 ± 4.5 ～ 12.4 ± 2.6 の範囲であった[8]。さらに、幾つかの先行研究では、「主観的幸福感」は女性に比べ、男性のほうが高い傾向であった。しかし、本研究では男性より女性のほうが「主観的幸福感」が高くなっていた。これは、ショッピングセンターという場所＝環境が結果に影響したと考えられる。先行研究と比較すると、男性と比べ女性の「孤独感・不満足感」への肯定的得点が高かった。「シッピングセンター、商店施設等は女性の認知が高く、「買い物」に関しては女性の方が周辺環境を意識している」[9]と報告があるように、女性はもともと買い物に対して男性より好印象にあると考える。ショッピングセンターに訪れること自体が、楽しみ＝肯定的感情となって、「孤独感・不満足感」に対しては肯定的に効果したと考えられる。

年齢では、「主観的幸福感」、また３因子ともに差はなかった。これは、赤澤[10]の研究結果と同様であった。しかし、太湯らの研究[2]では、年齢が上昇するにつれてモラール得点が高まると報告している。その理由として、85 歳を超えると自分も周囲も老いを受け止めやすくなり、受け止めた上で生活の充実を図ろうとする姿勢が生まれてくるのだろうと述べている。小坂[7]の研究では、「主観的幸福感」と「老いに対する態度」において、年齢が高くなるほど得点が低くなっていた。「老化に伴って、日常生活に支援が必要な状況をどう受け止めているかが影響し、更に老化による身体機能の低下や障害を自然現象と受け止めることができない、必要なときに適切な支援などが受けられないなどが影響している。」[7]と述べている。本研究は、ショッピングセンターを訪れることができるような身体機能の高い高齢者が対象となっているため、小坂[7]の研究結果とは異なったと考える。

家族構成では、二世帯同居の高齢者が、「主観的幸福感」がもっとも高い点数であった。杉井の調査では「子どもと同居しているからといって、必ずしも主観的幸福感が高くなるとはない」[11]と指摘している。しかし、本研究では、夫婦世帯より二世帯同居が「孤独感・不満足感」について肯定的に受け止めていた。家族関係がうまく機能していることが、高い得点となったと推察された。

職業では、職業に就いている高齢者は、職業に就いていない高齢者より、「老化に伴う態度」が高かった。働くことができることは、身体的にも精神的にも健康な状態であることが推測される。そのため、職業に就いている高齢者は、自分自身の老化に対して、前向きに受け止めているのではないかと考えられる。

経済状態において困っていない群より困っている群が、「主観的幸福感」と「孤独感・不満感」が高かっ

た。赤澤[10]や岡本[12]および鈴木[13]の研究においても、同様の結果が出ている。経済状態は高齢者の「主観的幸福感」に大きく影響を与えると考える。岡本は「暮らし向きの程度が良好な者は、そうでない者と比較して生きがい感を高める活動を行ないやすく、その結果として生きがい感が高くなるものと思われる」[12]と述べている。経済的に困っている場合は、ショッピングセンターでの買い物の際、さまざまな妥協を強いられてしまうだろう。思うように買い物ができないことは、自分自身の生活への不満や不安となるのではないだろうか。

今回、私たちはＹシッピングセンターに訪れた高齢者にアンケート調査を行った。アンケートへの回答中にもコミュニケーションを行うことを心がけながら実施した。そのため、対象者からいろいろな話を聞くことができた。ここで、インタビューで得られた一つの事例を紹介する。男性Ａさんは夫婦二人暮らし。現在は無職であり、妻は仕事のため不在のことが多い。男性は、「日中は特に何もすることがないので、よくこのＹシッピングセンターに訪れる。また、今日は別に友達と待ち合わせをしている。」と語っていた。男性は、妻が不在の時は自宅で一人の時間を過ごすことが多く、趣味に関することも語られることはなったことから、何もすることがないからという理由でＹシッピングセンターに訪れていた。男性にとってシッピングセンターは、時間を「つぶす」という目的で訪れているが、同時に友人と待ち合わせしていることから、友人との交流つまり社会的なつながりがうまれている「場所」でもあることが伺えた。

以上より、ショッピングセンターを訪れることは、「楽しい」という感情を抱きやすく、特に女性では「主観的幸福感」に影響を及ぼしていることが分かった。また、ショッピングセンターは、社会とのつながりが生まれやすく、自立した生活を維持していくために重要な「場所」であることが分った。それはつまり、高齢者がショッピングセンターを訪れることは、生活を支える機能面と、「孤独感・不満足感」に対して肯定的な面が高いことから、人生を豊かにするなど、心理的な潤いをもたらす「場所」となっていると考える。

研究の限界と課題

今回の調査は、対象者が 35 名と少ない上に、日曜日の調査となったため、平日等ショッピングセンターを標準的に使用する高齢者の実態が把握できていない。今後は、調査対象者を増やす上に、月曜日から金曜日の平日の時間帯での調査を計画し、本研究結果とどのような違いが生じるのか否か検討する必要がある。今後の課題として、時機を得たい。

謝辞

本調査において、調査場所としてご協力いただいたＹシッピングセンター、並びに調査の回答にご協力いただいた高齢者の皆様に感謝いたします。

引用参考文献

1) 太湯好子、岡本絹子、菊井和子他著「在宅高齢者の生活実態とモラールに影響を及ぼす諸要因の検討」川崎医療福祉学会誌　Vol.6 No.1：115, 1996
2) 水野映子「高齢者の外出の現状・意向と外出支援策」http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi/report/rp0409.pdf　2013.7.29
3) 共生社会 6 策統括官、高齢社会対策「平成 24 年版高齢者白書」http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/24pdf_index.html 2013.7.29
4) 山口県主要基礎データ（健康福祉部）http://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a13200/kiso-data/data.html　2013.7.29
5) 堀洋道「心理測定尺度集Ⅲ－心の健康をはかる〈適応・臨床〉－」株式会社サイエンス社 P91, 2001
6) 吉原裕美子、本多ふく子「在宅要介護高齢者の主観的幸福感に関する報告－質問紙調査とインタビューを通しての考察－」茨城県立医療大学紀要　Vol.3：20, 1998
7) 小坂信子「在宅高齢者の Q.O.L － PGC モラールスケール・フェイススケールを用いた調査から－」日本赤十字秋田短期大学紀要　Vol.12：50-51, 2007
8) 青木邦夫、松本耕二「在宅高齢者の精神的健康の実態とそれに関連する要因」山口県立大学」大学院論集　Vol.1:136, 2000
9) 櫻井君紀、大森峰輝、小林正「想起エレメント法を用いた豊田高周辺意識の調査」

豊田高等専門学校研究紀要　Vol.40：103，2007
10）赤澤淳子、水上喜美子「地方居住高齢者の社会的ネットワークと主観的幸福感」 仁愛大学研究紀要　Vol.7：8-11，2008
11）杉井潤子「高齢者の主観的幸福感をめぐる一研究　－家族システムの構造的要因との関連において」家族社会学研究　No.4：61，1992
12）岡本秀明「高齢者の生きがい感に関連する要因」－大阪市 A 区在住高齢者の調査から－」和洋女子大学紀要　Vol.48:118-120，2008
13）鈴木規子、吉田紀子、谷口幸一「在宅高齢者の主観的幸福感の影響要因に関する調査研究－心身の健康指標ならびに社会的指標との関連－」東海大学健康科学部紀要　Vol.6:4，2000